

古材ストックヤード in 神戸・苅藻島

BIVOUARC ビバーク

建築をほどく。
古材をひらく。

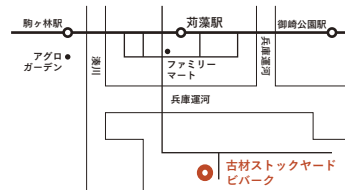
古材ストックヤード「ビバーク」

〒653-0033 神戸市長田区苅藻島町 3-12-28

苅藻島クリーンセンター内

神戸市営地下鉄海岸線「苅藻駅」徒歩 15 分

開館日時：金 - 土曜日 11:00-16:00



KOBE
CITY of DESIGN

photo by Jo Shusaku (p.3, 10, 17)

古材活用普及啓発活動及びストックヤード運営業務／2026 年 3 月発行



BIVOUARC

||

bivouac

(野営地や一時的な滞在場所)

+

arc

(architect / 建築)

ビバークは、解体家屋より回収した廃材が「古材」として次の活用へ進むためのストックヤード（一時保管所）です





古材は、ただのごみ？

目の前で解体されていく、誰かの家。木材も、家具も、そのほとんどが廃棄物として処理されます。

もしあなたがこの現場に居合わせたなら、「もったいない」と感じるかもしれません。しかし、古いものをリユースするには多くの手間がかかるため、まだ使えるものでも捨てるほうが圧倒的に早く、安い。その効率性のなかで、すぐそばにあるはずの“資源”は自らの価値を再確認される間もなく、私たちの暮らしから離れていっています。

スクラップ&ビルドがもたらす環境負荷や社会的なデメリットは広く認知され、SDGsやサーキュラーエコノミーといった視点から社会の再構築が進む今。様々な分野のものづくりの現場で明るみになってきたこの

“違和感”に多くの人が気づき、ものづくりの仕組みを、ひいては暮らしのあり方そのものを、問い始めています。

私たちは「古材」を題材に、この“違和感”と向き合います。建築をただ「壊して捨てる」のではなく、まだ使えるものを次へと「使い継ぐ」。この道筋ができれば、空き家は「地域の課題」から「地域を育む資源」へと価値を変えるはずです。

古材が、当たり前の選択肢のひとつとなるように。

ビバークは、効率と合理性を超えて、古材を地域資源として健やかに循環させるためのプロジェクトです。

空き家と 住宅解体の現状

日本の空き家と解体の現状をまとめてみました。解体工事で手放される木材、建具、家具、金物・設備部材の多くは、再利用のための分別がされないまま産業廃棄物として扱われます。古材を活用するためには手

解体や釘抜き、洗浄、選別、規格を揃えるための製材といった手間が必要で、流通するまでの活用コストが新建材を上回るからです。一般的に“廃棄物”とみなされる古材は、本当に価値のないものなのでしょうか。



空き家の現状

全国の空き家数

約 **900** 万戸

約 7 戸に 1 戸が空き家

神戸市の空き家数

約 **11.8** 万戸

約 7 戸に 1 戸が空き家

市場に出ていない空き家

約 **385** 万戸

市場に出ていない空き家

約 **3.95** 万戸

全国の新築住宅数

約 **80** 万戸 / 年

全国の住宅解体数

約 **10** 万戸 / 年

空き家 1 軒の CO₂固定量

約 **15** t

25 m²の杉材を使用した場合から算出

空き家のこれから

空き家数 : 増加傾向

利活用率 : 低下

管理コスト : 増加

解体件数 : 増加

建築廃棄量 : 増加

出典：総務省「住宅・土地統計調査」2023 年
国土交通省「建築着工統計調査報告」「建築物滅失統計調査」2026 年
林野庁「建築物に利用した木材に係る炭素貯蔵量の表示に関するガイドライン」2021 年

古材の価値はどこ？

経済的には無価値とされる古材ですが、情報感度が高いクリエイターやユーザーの間でその需要は確実に高まっています。価格

や効率においてのデメリットを超えて、こんな価値が見出されているのかもしれない。

1

環境的な価値

廃棄物ゼロ

解体ゴミを「資源」へ。最終処分場の負担を軽減。

炭素の貯蔵

焼却による CO₂放出を防ぎ、カーボンニュートラルに直結。

低エネルギー

すでに乾燥している材を活かすことで、生産エネルギーを抑制。

2

意味的な価値

感情のレスキュー

壊す際の家主の寂しさや罪悪感を、次への期待へ変える。

経年変化の質感

再現不可能な「経年変化」が生む唯一無二のテクスチャー。

3

社会・文化的な価値

地域資源の循環

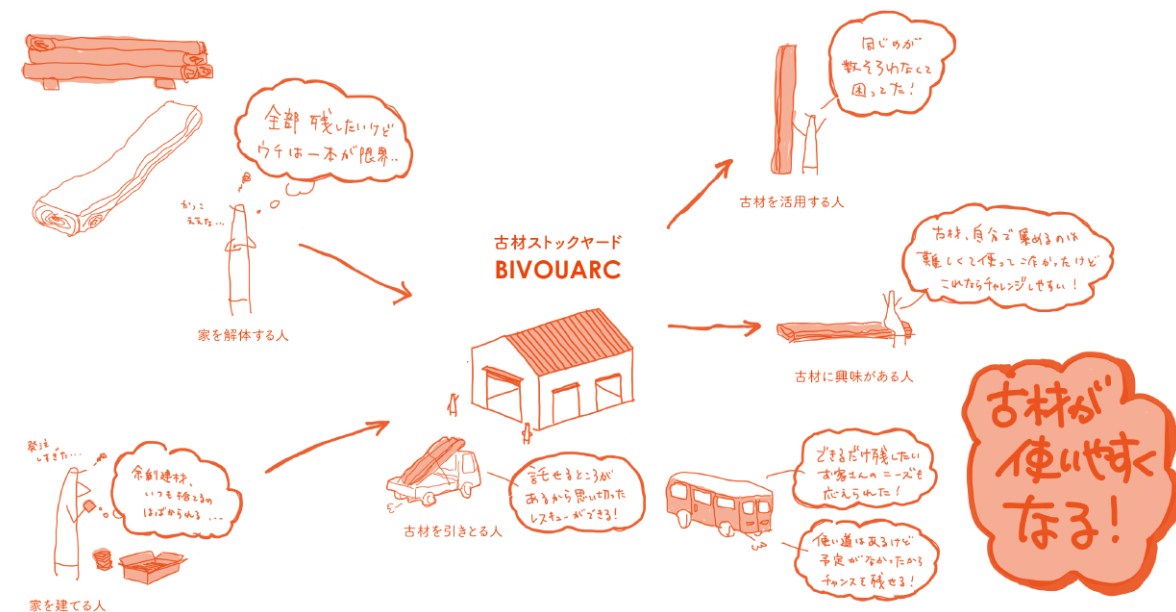
廃棄物を「地域の資源」として再生。

循環型文化の創造

身の回りにあるもので暮らす文化を育む。

古材ストックヤードが地域にあれば…

「古材を資源として扱う」という選択肢を、家を手放す人やつくる人に提示できます。資源の滞留拠点があることで、廃材やデッドストック材、古家具、古雑貨が循環する仕組みが根づく未来を想像しています。



ビバークがすること

ビバークは古材や古家具などの建築廃材を集め、一時的にストックし、その価値をリサーチするための場所。単なる保管ではなく、古材の価値を見つめ直し、循環の可能性を探るための実践拠点として機能します。

Stock

古材や古家具の
引き取り・保全・保管

地域の住宅や建物から手放される古材や古家具を引き取り、一時的に集めます。家屋からの回収作業や釘抜き、清掃などの保全作業を通じて、素材の状態を見極め、再利用可能な状態に整えるノウハウを蓄積します。素材に再生の機会を与えると同時に、その道筋を整理します。

Research

古材を再評価する
ための観察・研究

大学や研究機関と連携して、古材を“資源”として捉え直すためのリサーチを行います。古材や古家具の引き取りや保全、利活用の事例を観察・記録し、社会、経済、文化、環境など様々な視点から古材の価値をを再評価して、見過ごされてきたその可能性を見つめ直します。

Circulate

建築廃材の
循環の道筋をつくる

保管・保全・観察・研究のプロセスを経て、建築廃材が持続可能な形で循環する仕組みを探ります。クリエイターや有識者との展示やワークショップ等をとおして、素材の価値を再発見し、地域資源としての循環の道筋をつくり、次の利用者や用途へつなぐことを目指します。





Stockyard

ストックヤード

荻藻（神戸市長田区）にあるストックヤードでは、解体やリノベーションで手放される廃材や家具等を引き取り、集積するとともに古材を扱う視点や知恵が見える形で残しています。

荷解き・保全

引き取ってきた古材や古家具を車から下ろし、釘抜き、洗浄、製材を行います。

古材ストック

木材は「未処理」「釘抜き済」「洗浄済」と段階ごとに整理します。

古材利活用の事例展示

古材を素材として、クリエイターが再構築したプロダクト、建築に活かした事例を集めて展示。

企画展・ワークショップ

建築廃材などをテーマにした、トークイベントやワークショップを定期的開催。

ビバークの 未来予想図

私たちは、この未来にワクワクしてます。

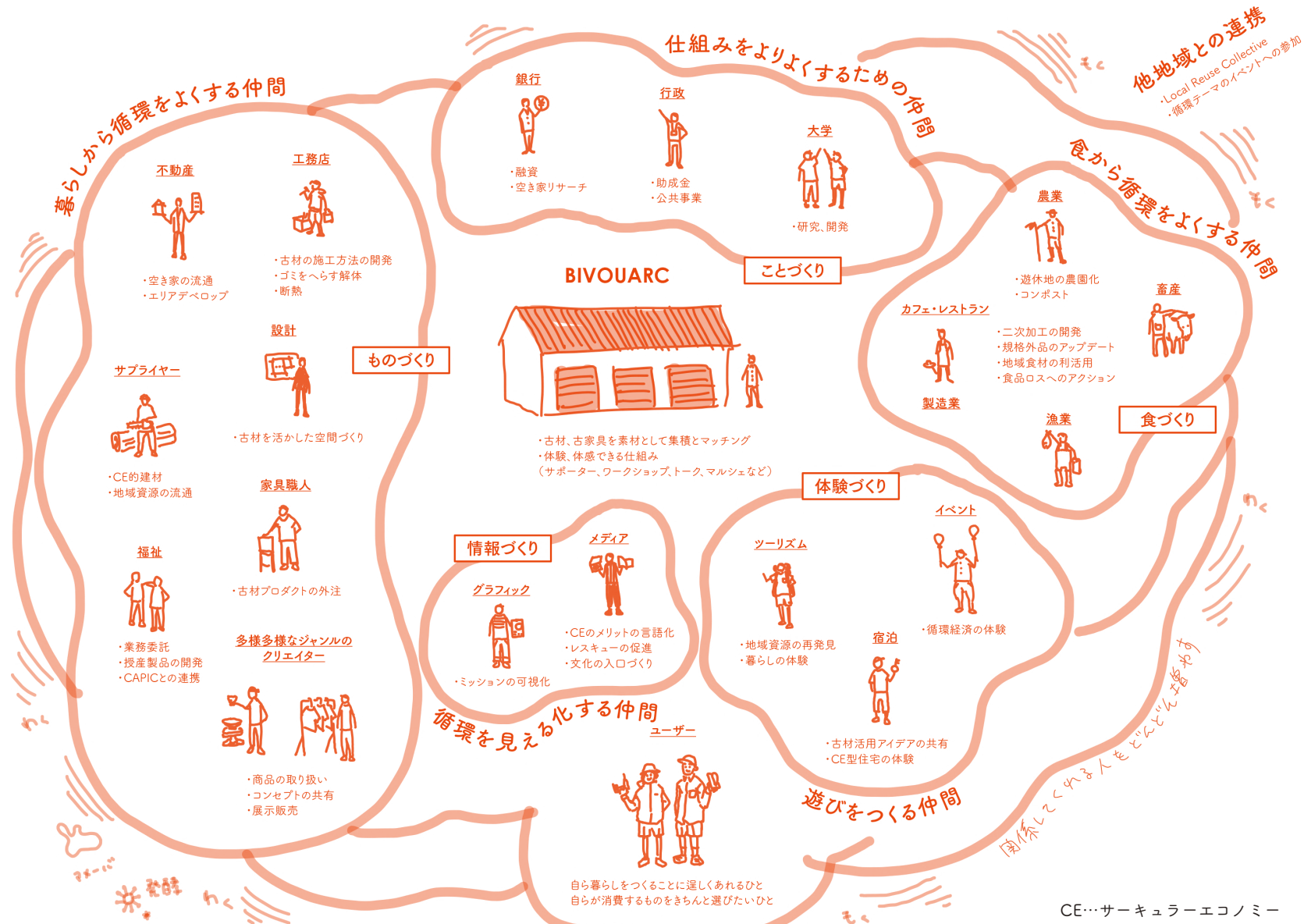
これから先の豊かさを描くには、立場や役割を越え、
経済だけではなく、環境や暮らしとあらためて向き合った
価値観をそれぞれ持ち寄り、活かし合うことが鍵となるはずです。

身の回りの資源と技術を存分に使って、暮らしを再構築する。
それはこの時代の節目で生きる私たちの役割であり、
大いに悩み、楽しむべき余白だと思うのです。

ビバークはこの再構築を「古材」を起点に始めました。
でも、古材だけの話ではないんです。

あらゆる領域と連環しながら、
これからの暮らしをより手ざわりのあるものにする
選択肢を一緒に作りたと思っています。

垣根を越え、正面から、あるいは斜めから。
今、この足元を共に耕してくださる方、ぜひ一緒にしましょう。



Instagram : @bivouarc

CE…サーキュラーエコノミー
CAPIC…刑務所作業製品

Interview

ReBuilding Center JAPAN 代表 東野唯史 (あずの ただふみ)



2025年8月、神戸市の古材ストックヤードの事業提案をする前のこと。ReBuilding Center JAPANの東野さんに、ビパークのこれからについて相談した日の記録。

—— 今日ご相談したいテーマは「行政との連携」です。施設オープンまでの半年で何をすべきか。そして、初年度の活動として「研究評価」と「課題抽出」はどのようにすべきか。行政とも協働されている東野さんはどのように思われますか？

行政と深く連携するなら「一般廃棄物」のレスキューを提案してみては？ 産業廃棄物だけではなくて、家庭から出るゴミの中にも救えるものがある。一般廃棄物は自治体の管轄だから、連携の武器になると思う。昔、「ぐるぐる市」という不要な食器を市民が持ち寄り、自由に持ち帰れるイベントがあって。民間のおばちゃんと諏訪市が共同開催していて、市が広報誌に載せるだけでも認知度が違った。

—— 行政と連携して一般廃棄物にも着手できると、可能性が広がりますね。

公共施設（学校や体育館）の解体時にレスキューを入れて、その古材で家具を作ってふるさと納税の返礼品にするモデルを、諏訪市に対して提案していて。市外に出た人が地元の思い出を返礼品として買うことで、税金が市に還流する。これなら行政にも明確なメリットができる。

—— 神戸市でもそんな取り組みができるでしょうか。

諏訪市の人口は4万7千人で、神戸市は150万人規模。特に環境局が元気なら、大いにチャンスはあると思う。僕を感じる課題は

解体設計（解体の工事計画）の要件にレスキューが入っていないこと。設計段階で組み込めれば、解体業者の手間も増えずスムーズにいくはず。

—— 「研究評価」についてはいかがでしょうか。環境的な価値と社会的な価値（使い継ぐ文化）の2軸で、価値を評価することを今は検討しています。

数値化も重要だね。例えば、諏訪市武道館のブナの床材500平米をレスキューすると、約10トンのCO2削減になる。プロジェクト全体では25トン以上の削減が見込めるという試算。神戸市も2050年のゼロカーボンシティを掲げているなら、こうした数値は喜ばれるはず。注意点は、一般廃棄物の処理業者との関係。業者はゴミの「量」に対して市から費用を支払われるから、ゴミが減る（レスキューされる）と利益が減るという構造的対立がある。そこを、業者のブランディング向上（ゴミを減らすために働くポジティブな姿勢）として巻き込めるかが鍵だね。

—— なるほど。公共施設のレスキューは市民の“寂しさ”に寄り添えて、情緒的価値

もありますね。

神戸市への事業提案の資料を見ると、情緒的な価値はまだ弱い印象があったから、もっと目を向けてみてもいいかもしれない。あとは、古材をクリエイターに開放する“オープンファクトリー”的なハブにすることが大切。売上を追わなくていい予算があるなら“良き媒介者”として制作事例をストックし、報告書にまとめるだけでも価値がある。文化を広めるなら“みんなが真似したくなる”ような営利モデル（営利企業）がいい場合もある。リビセンは最初から営利企業を選んだ。NPO化するかは慎重に。形はどうであれ、地元の実践者が組んで施設を運営する強みは絶対にあるよ。

—— ありがとうございます。いいヒントをたくさんいただきました！

(2025年8月26日 Zoomにて)

「環境施設」1984年生まれ。大森喜久男、阪市と共同設計でデザインを手がけた後、独立。2014年より空間デザインユニット「Innovella」にて家の再設計と活動開始。2016年設立の環境再生デザインショップ「ReBuilding Center JAPAN」を19の自治体で設立。

